

6. 「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期の第1四半期(12世紀後半～13世紀後半)

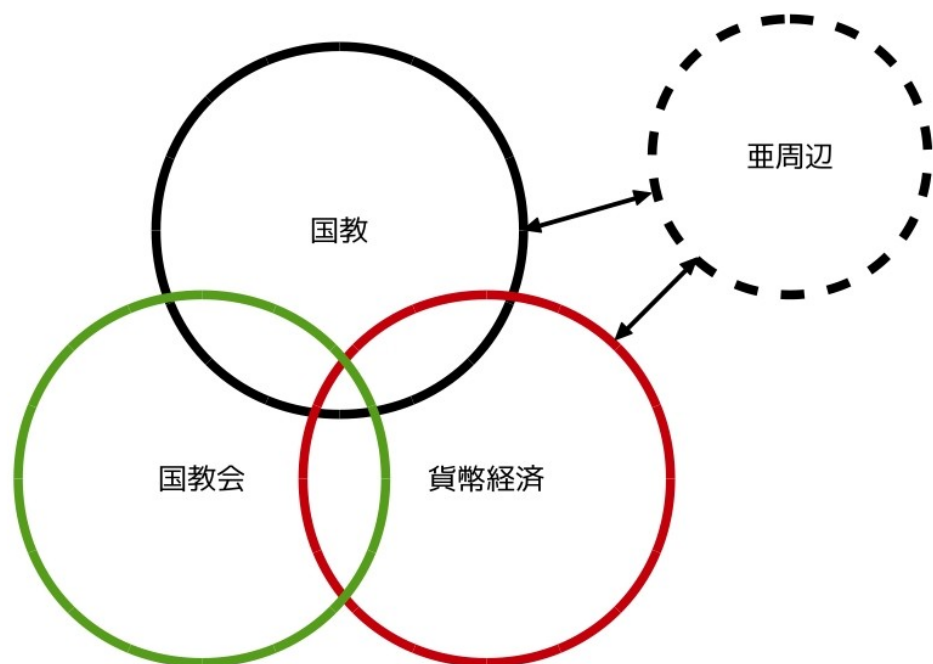
6.1 「広義の中世」と「広義の近代」のちがい

中世帝国と貨幣経済が誕生した場面から「広義の中世」がはじまる。そして封建国家と商品経済が誕生した場面から「広義の近代」がはじまる。

これまで、中世帝国の体制と貨幣経済の進展を中心に世界史空間と世界経済の基礎的变化を述べてきた。本節でそれらに再度言及し、「広義の中世」を整理する。さらに封建国家と商品経済について言及し、「広義の中世」と「広義の近代」のちがいをあきらかにする。

下図(図9)は中世帝国の統治形態の抽象である。

図9 中世帝国の統治形態



政体を軍政と民政に分割し、民政を中央集権化した「帝国」が中世帝国である。民政の中央集権化が官位差をつくり、官位差が部族差を解消する。そして皇帝や「諸王の王」が軍政と民政を束ねるが、血統や人格だけで軍政と民政を束ねることはできない。皇帝や「諸王の王」は金貨や銀貨を発行して軍政と民政を束ねた。すなわち、金貨や銀貨は皇帝や「諸王の王」が武官や文官に与える財である。

他方、国教＝最高法規が他の信仰を糾合して慣習法を束ねる。そして国教会が統治機構になる。国教会は金融も営んだ。キリスト教会や仏教寺院への寄進は事実上の預金である。

(サーサーン朝ペルシャでは、神官が文官を兼任した。東ローマ帝国＝ビザンツ帝国も同様である。それどころか、学校の教師を兼任したりする。筆者は、ユリアヌスがキリスト教会に反発したもっとも大きな理由はそれであると考えているが、東ローマ帝国＝ビザンツ帝国が国教や国教会の「弊害」を取り除くのはバシリカ法を制定してユスティニアヌス法＝慣習法体系を卑俗法化したマケドニア朝期である。とはいえ、バシリカ法の制定がただちに国法の制定と立法府の設立につながるわけではない。中世の政体は司法府中心型の政体で、裁判所＝教会が必要に応じて慣習法に修正を施し判決を下していた。すなわち、当時の司法府は準立法府でもあった。筆者の憶測であるが、マケドニア朝ビザンツ帝国がバシリカ法を制定した目的は、皇帝が「立法者」として君臨し、慣習法の修正解釈を一元することにあった。しかし、それが国法の制定と立法府の設立につながる。司法府が立法機能を喪失し、国法と立法府が誕生する歴史過程は考察に値するが、本書では言及しない。ここでは、国法と立法府が存在しない中世社会で立法機能を有していたのは裁判所である、と言うに止める)

財貨(金貨や銀貨)が土地だけでなく人間=奴隷も売買可能な財=財産にする。そして財貨の大保有者たち(貴族階級や聖職者階級)が巨人化する。貴族階級や聖職者階級が保有する荘園が増大し、古代帝国からの継承(公有地や共有地、および自由農民)が縮小した。他方、財貨と財貨、および財貨と物品貨幣(家畜や穀物)のクラス間交換が具現し、経済空間に順序構造=貨幣経済が生成する。その後荘園が巨大化した場面で中世帝国は財政難に陥るが、貨幣経済が中世帝国のスキームを維持する。すなわち、「広義の中世」の出現期(4世紀後半～8世紀後半)に中世帝国で国教と国教会、貨幣経済が三位一体化し、版図内の民衆を支配した。

中世帝国の他に「広義の中世」の支配的要素がひとつある。亜周辺である。「広義の中世」の出現期は中世帝国の版図外に他の中世帝国と亜周辺が外在する時代である。

他の中世帝国も独自の国教を有し、独自の財貨を発行した。異なる国教と異なる財貨の下で異なる中世帝国と中世帝国が対立し、戦争が勃発する場面があった。他方、統治形態と貨幣経済の対称性が外交や平和条約の締結を容易にした。

だが、亜周辺に国教はないし、財貨もない。亜周辺の民衆も信仰に帰依していたが、彼らの信仰は掟であり、他の信仰や慣習法を糾合する場面はなかった。また、亜周辺の族長が金貨や銀貨を発行しても統治制度として機能する場面はなかった。

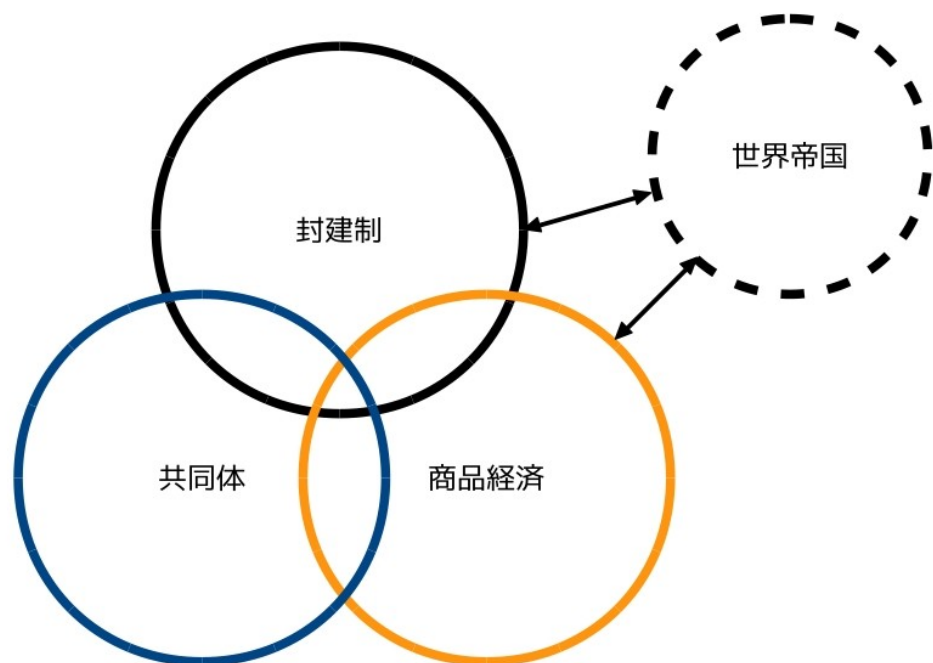
とはいえ、亜周辺にも貨幣経済が浸透する。亜周辺は中世帝国の富財をしばしば略奪するが、亜周辺の統治形態と中世帝国の統治形態は非対称である。したがって中世帝国と亜周辺の外交や条約締結は容易でない。多くの場合、中世帝国と亜周辺の関係は軍事的対立になり、戦争が恒常化する。

亜周辺からも中世帝国の国教=法は見えるし、財貨=統治制度も見える。中世帝国の支配者層は亜周辺に国教と財貨を押し付け、軍事的対立を解消しようとした。すなわち、中世帝国は「平和」のために版図を拡大し続けた。

(むろん領土的野心で版図を拡大する場面もあった。しかしそれを論証するのは意外にむずかしい。歴史家でさえ、原因を皇帝や「諸王の王」の情緒的判断に置く場合がある。だが、亜周辺に最高法規に相当する「国教」は存在しない。また、中世帝国と亜周辺は財貨=貨幣に対する主観がちがう。したがって、亜周辺の支配者層が交代しても、中世帝国の軍事政策に変化は生じない。それが、中世帝国と亜周辺の戦争が恒常化した原因である)

下図(図10)は封建国家の統治形態の抽象である。

図10 封建国家の統治形態



はじめりはアッバース朝イスラーム帝国の金銀複本位制である。金銀複本位制下で銀貨が秤量貨幣化し、すべての銀貨が等価になる。そして財貨の政治的機能(統治制度としての機能)が低下する。

他方、10世紀のマケドニア朝ビザンツ帝国が「国法」、11世紀の北宋が「新法」を制定して慣習法を卑俗法化した。それにより国教＝最高法規と国教会＝統治機構の政治的役割が低下する。マケドニア朝ビザンツ帝国も北宋も計画経済を推進したが、その後12世紀のコムネノス朝ビザンツ帝国と南宋が計画経済下で身分制と恩貸地制を具現する。

(最初に身分制を制定した中世帝国は遼＝契丹である。遊牧民と農耕民の居住地域を分けし、慣習法による区別を厳格化したにすぎないが、それが「身分」になる。遼＝契丹では、農民や商工業者が兵士になる場面はなかったし、不可能なことでもあった。ちなみに江戸時代の日本の身分制も単純である。すなわち、「士農工商」である。江戸時代の被差別民は支配されない人々であったが、「身分(職業的身分)」のない人々でもあった)

恩貸地制は諸侯や農民が開墾した山林等の所有を皇帝や国王が保証する制度である。開墾地に農民が移住し、荘園が労働力を喪失して衰退する。そして、身分制と恩貸地制が複合して新たな統治制度＝封建制が誕生する。さらに村落共同体＝農村が誕生し、中世都市＝商工業都市も誕生した。そして亜周辺がコムネノス朝ビザンツ帝国や南宋から封建制を輸入し、封建国家に変貌する。

(ノヴゴロドでは民主共和制も誕生したが、封建制と村落共同体＝農村、中世都市＝商工業都市が共存する共和的社会が「封建社会」である。ちなみに、封建社会の贈与と返礼の関係を狩猟採集社会の供託関係や互酬関係と同様に考える文化人類学者や社会学者がいるが、まちがっている。封建社会は計画経済の下で贈与を行う。そして返礼を強要する。筆者の考えでは、狩猟採集社会の供託関係や互酬関係は余り物を互いに譲渡する関係である。ふつう、肉や魚は腹いっぱい食べても余る。余った肉や魚は腐らせるより他人に食べてもらうほうがよい。同じことが採取した果実や木の実等についても言える)

以上が、「広義の中世」の突破期(8世紀後半～12世紀後半)の概要であるが、封建社会の進展に並行して秤量貨幣化した銀貨＝銀が世界通貨になり、世界通貨＝銀の下で経済空間に位相構造＝商品経済が生成する。そして物品貨幣が「商品(ゼロ次クラス商品)」になり、金融商品(手形や債権等)が誕生して信用取引が増大する(ユーラシア大陸西部では、商品経済の下で金貨が決済手段になる)。

12世紀後半のユーラシア大陸東西で「広義の近代」がほぼ同時にはじまった。だが、コムネノス朝ビザンツ帝国も南宋も13世紀に崩壊する。しかし亜周辺がコムネノス朝ビザンツ帝国や南宋から封建制(身分制と恩貸地制)を輸入し、「封建国家」に変貌する。封建国家が国法を制定する時期はまばらであるが、世界通貨＝銀と位相構造＝商品経済が封建国家の成長を促した。他方、封建国家の外部に「世界帝国」が登場する。

図9の封建国家は図8の亜周辺である。「広義の近代」の出現期にユーラシア大陸地図の「地」と「図」が反転した(コラム35)。

コラム35: 「地」と「図」の反転

歴史家の故岡田英弘氏は、モンゴル帝国が誕生した場面から「広義の近代」がはじまったと論じておられる。だが、岡田氏にユーラシア大陸地図の「地」と「図」が反転したとの認識はない。

筆者の認識では、「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期の重畳が「地」と「図」の反転を引き起こした。あるいは古い経済構造＝貨幣経済と新しい経済構造＝商品経済の重畳が「地」と「図」の反転を引き起こした。

現代世界でも「広義の近代」と「広義の現代」が重畳し、おそらく「地」と「図」の反転が生じている。あるいは「旧世界」と「新世界」の反転が生じている。それについては後述するが、さしあたり中国の動向を軽視できない。

6.2 モンゴル帝国の誕生と金朝の滅亡

前章で述べたように、金の西方支配は西夏と接するオルドス地方で止まる。他方、カトワーンの戦い後、耶律大石が東征軍を編成して河北の奪還を目指す、行軍中に死去する。

カトワーンの戦いから察するに、耶律大石が編成した東征軍は大軍であった。耶律大石の死後、その大軍が全軍帰還すれば、西遼は再度東征を実施したかもしれない。あるいは、西征してホラーサーン地方やイラン高原を征服したかもしれない。だが、耶律大石の死後、西遼は一切の軍事行動を止める。

歴史家たちは、塔不煙(タブイェン。西遼の皇太后)が遠征を嫌い、西遼は軍事行動を止めた、と論じている。しかし塔不煙は1150年に死去し、その後耶律大石の末子耶律夷列が即位して20年以上在位している。耶律夷列が遠征を嫌ったとは考えにくい。おそらく、耶律夷列は大軍を編成できなかった。耶律大石とともに東征した兵員の大半が帰還しなかったためである。

遼滅亡後、モンゴル高原が空白地帯化する。当初、モンゴル高原で暮らしていた契丹人は金軍の侵攻を恐れたはずである。彼らは耶律大石とともにトランスオクシアナ地方に移り、西遼を建国した。その後東征に従軍し、河北の奪還を目指す。

耶律大石の死後、彼らはモンゴル高原に残る。彼らは、河北の奪還を断念したわけではない。しかし再度の東征に必要な中心が不在であった。

1206年、モンゴル高原を流れるオノン川上流でテムジンが「チンギス・カン」に即位し、新たな中心が誕生する。

テムジンが契丹人であったか否かはわからない。契丹人であったとしても、出自は遼の名門ではなかったと思う。とはいえ、「チンギス・カン(おそらく「聖なるカン」か「最初のカン」という意味)」に即位したテムジンは耶律大石が残した「遠征」を引き継がねばならない。即位後、テムジン＝チンギス・カンは東征を開始する。

テムジン＝チンギス・カン率いるモンゴル軍が金に侵攻し、オルドス地方と河北を奪取して占領した。金の朝廷は中原に逃れ、開封に遷都する。その後モンゴル軍は西征してトランスオクシアナ地方を奪取し、南下して西夏を滅ぼす。テムジン＝チンギス・カンは、西夏が滅ぶ直前に死去するが、オルドス地方と河北を奪取した時点で遼＝契丹の版図を概ね復元した。

(当時の河北は江南＝南宋から技術を輸入し、小麦の生産量が著しく増大していた。したがって河北を奪取したモンゴル軍は、食料不足に悩む場面がなくなる。また、モンゴル軍はオルドス地方を奪取した場面で金の官営牧場を占領し、数十万頭の良馬も獲得した)

モンゴル軍がオルドス地方と河北を奪取した頃、ホラムズ・シャー朝ムスリム軍がトランスオクシアナ地方に侵攻し、アラーウッディーンと同盟を結んだクチュルクが西遼の帝位を篡奪していた(クチュルクはナイマン族出身のモンゴル人で、テムジン＝チンギス・カンに一度破れている)。多数の軍馬を獲得したモンゴル軍は西征してトランスオクシアナ地方を奪還し、クチュルクを処刑する。その後ホラーサーン地方に進軍し、ホラムズ・シャー朝を滅ぼす。

とはいえ、ホラーサーン地方の支配は部分支配に止まる。トランスオクシアナ奪還後、モンゴル軍は西夏に侵攻する。モンゴル軍は西夏の岩塩産地を占領した(コラム36)。

テムジン＝チンギス・カンの死後、彼の三男オゴディが即位して「大カン(大帝あるいは大元帥)」を号する。オゴディ(在位1229～1241年)は凡庸であったが、河北で生産する大量の小麦、金の官営牧場を占領して獲得した数十万頭の良馬、旧西夏で産出する多量の岩塩、旧西ウイグル王国(タリム盆地およびジュンガル盆地)で製造する良質な鉄製武具や綿織物等があった。すなわち、大軍を編成して遠征し、兵站を維持する準備が整っていた。即位後、オゴディは開封に遷都した金朝の討伐をはじめた。

モンゴル軍は現在の山東省と山西省から開封を目指す部隊、および山西省から陝西省を迂回して関中から開封を目指す部隊に分かれて進軍する(他方、別動隊が豆満江流域を支配し、韓国＝高麗に侵攻する)。だが、前章で述べたように、淮北の地は荒廃している。山東省と山西省から開封を目指す部隊は道なき道を進み、進軍が大幅に遅れた。結局、関中から開封を目指す部隊だけが金軍と戦う。

兵員数は金軍が圧倒していた。だが、淮北の荒廃は金軍にも及んでいた。河北を失った金朝は穀物の確保に苦しみ、金軍の兵たちは十分な食料を得ていない。彼らはほとんど飢餓状態でモンゴル軍に決戦を挑む。他方、モンゴル軍は塹壕を掘り持久戦に応じる。持久戦が功を奏し、金軍は瓦解する(三峰山の戦い)。

1234年、モンゴル軍が開封を占領し、金朝が滅ぶ。オゴディは河南および荒廃した淮北(中原の地)を放棄した。他方、河北を分割し、各部族に分配する。その後モンゴル高原に帝都カラコルムを建設し、南征と西征をはじめた。

(オゴディは、荒廃した淮北での放牧を検討したが、中止した。中国史の専門家たちは、淮北での放牧を検討したオゴディを非難する。だが、荒廃した農地は放牧で利用するほうが合理的である。現実には、15世紀の西ヨーロッパ諸国は荒廃した農地で放牧をはじめた。また、今の日本で「水田放牧」がはじまっ

ている。そして、それが40万ヘクタール以上の休耕地を活用する手段のひとつになっている。筆者は、オゴディは荒廃した淮北での放牧を中止せず実施すべきであった、と考える。ちなみに、北宋期の黄河は山東半島の南を流れていた)

南征軍は関中から南下して進軍したが、名将孟珙率いる南宋軍が撃退する。他方、西征軍はカスピ海北方の「草原の道(カスピ海やアラル海、バルハシ湖の北方を通る道。概ね現在のシベリア鉄道沿線道)」を通り、クリミア半島付近まで進軍する。途中、多くのキプチャク人やペルシャ人が殺害されるか西征軍の軍門に降った(前章で述べたキョセ・ダグの戦いでルーム・セルジューク朝ムスリム軍を圧倒したモンゴル軍=探馬軍は、西征軍の別働隊であるが、兵員の大多数がペルシャ人である)。

西征軍は1238年のシチ川の戦いでウラジーミル・スーズダリ公国軍を破り、1241年のレグニツァの戦い(ワールシュタットの戦い)でドイツとポーランドの連合軍を破る。さらにモヒの戦いでハンガリー軍を破る。そして、広大なカルパチア盆地(パンノニア地方)を目指す。大カン・オゴディが死去する。オゴディの死報を得た西征軍総司令バトウはカスピ海北岸に注ぐヴォルガ川河口付近の中世都市イティルまで後退した(イティルは滅亡したハザール・カガン国の首都であるが、正確な場所は今も不明である)。

バトウは、パンノニア地方にいたのでは、政変が勃発した場面でカラコルムに赴くことができない、と判断したようである。オゴディの死後、彼の長男グユクが即位するが、1248年に死去する(グユクの母親はオゴディの正室ではない。グユクの死はおそらく暗殺である)。そしてチンギス・カンの末子トルイの長男モンケが大カンに即位する。

トルイは三峰山の戦いで金軍を破ったモンゴル軍の総司令で、バトウの父親はチンギス・カンの長男ジョチである。しかもモンケの母親とバトウの母親は姉妹である。バトウにとって、モンケの即位は歓迎すべきことで、カラコルムに赴く必要がなくなる。

バトウは、イティルでジョチ・ウルスを開国する。モンゴル帝国が支配するユーラシア大陸西北部は、キプチャク人が支配していた地域(概ね現在のウクライナ)で止まった。

コラム36: 西ウイグル王国の併合

テムジン=チンギス・カン即位後、クチュルクの専横に煩っていた西ウイグル王国は自発的にモンゴル帝国に服従する。テムジン=チンギス・カンは最恵国として西ウイグル王国を遇した。

西ウイグル王国にとって、テムジンは耶律大石の再来であったかもしれないが、テムジンが称したのは「グル・カン」ではない。「チンギス・カン」である。

オゴディの代に編纂されたと言われている「元朝秘史」によれば、テムジンの宿敵ジャムカが「グル・カン」を称したため、ジャムカを倒したテムジンはグル・カンを越えるカンすなわち「チンギス・カン」を称したことになっている。だが、この説明は怪しい。

(そもそも、ジャムカは実在した人物なのか。また、チンギス・カンが「グル・カン」を越えるカンであるのなら、オゴディも「チンギス・カン」を称すればよい。しかし彼は「大カン」を称した。そしてオゴディの死後、グユクもモンケも、クビライも「大カン」を称した。筆者は、テムジンに「グル・カン」を称せない事情があったと考える)

テムジン=チンギス・カンは遼=契丹の再興を目指した。したがって淮北の地は不要であり、開封に逃れた金朝を追走しなかった。他方、トランスオクシアナ地方の奪還と西夏侵攻は責務である。

だが、「元朝秘史」は遼を重視していない。歴史家の杉山正明氏が疑問を感じておられるが、筆者も同感である。世界帝国化したモンゴル帝国に、遼あるいは西遼の後継国であると言えない理由があったのかもしれない。

6.3 十字軍都市国家の滅亡とビザンツ帝国の存続

サラフディーン後のアイユーブ朝は彼の弟アーディル(アイユーブ朝第4代スルターン)の代に発展する。他方、インノケンティウス3世の死後、ローマ教皇に就任したホノリウス3世が第5回十字軍遠征を呼びかけた。十字軍の侵攻を知ったダマスカス王アル・ムアッザムは、エルサレムの城壁を破壊し、住民をシリアやエジプトに避難させた。

第5回十字軍の中心はハンガリー王アンドラーシュ2世であったが、彼は遠征の途中でエルサレムの荒廃を知り帰国する。だが、エルサレム王ジャン・ド・ブリエンヌとオーストリア公レオポルト6世、そして多数のドイツ諸侯が残る。1218年、彼らはジェノヴァ商船団の協力を得てエジプトに侵攻し、ナイル川河口付近の湾岸都市ダミエッタ(現在のディムヤート)を包囲した。

アーディルが死去し、後を継いだ彼の長男カミールはエルサレムの返還等を条件に和睦を提案する。ジャン・ド・ブリエンヌとレオポルト6世は提案を受け入れるが、ダミエッタ包囲後にローマから訪れた教皇特使ペラギウスが拒否する。ペラギウスは無謀な攻撃命令を繰り返し、十字軍は惨敗した。

ローマ教皇ホノリウス3世は、ドイツ皇帝フリードリヒ2世にも第5回十字軍に合流するよう呼びかけていた。しかしフリードリヒ2世はシチリア復興に専念する。だがホノリウス3世の死後、新ローマ教皇に就任したグレゴリウス9世に遠征を強いられる。

フリードリヒ2世は遠征の途につくが、軍内に疫病が流行ったため、一時帰国する。グレゴリウス9世は仮病と判断し、フリードリヒ2世を破門した。

1229年、破門されたフリードリヒ2世率いる第6回十字軍がパレスチナに進軍する。カミールは再度和睦を提案した。フリードリヒ2世は提案を受け入れ和睦する。和睦後、フリードリヒ2世はエルサレムに赴き、破門の身で「エルサレム王」に即位する。

(アル・ムアッザムが城壁を破壊した当時のエルサレムは、人が安心して住める都市ではない。すなわち、奪還する価値がない。だから、第5回十字軍はエジプトに進軍したわけだが、とはいえ十字軍遠征の目的は聖地エルサレムの奪還である。そして、フリードリヒ2世がエルサレム王に即位しなければ、エルサレムを奪還したことにならない。フリードリヒ2世は、一滴の血も流すことなく目的を達成し、エルサレム王に即位した。ちなみに、後のオスマン帝国がエルサレムの城壁を再建する)

1231年、第6回十字軍遠征から帰還したフリードリヒ2世は「皇帝の書」を發布し、官僚機構と統治機構を整備してイタリアの中央集権体制を確立する。他方、ドイツ諸侯と「諸侯の利益のための協定」を結び、自治を認めた。以後、ドイツの統治形態が分権統治になるが、王権を強化しようとしていた彼の息子ドイツ王ハインリヒに不満が募る。1234年、ハインリヒはローマ教皇グレゴリウス9世の誘いと新ロンバルディア同盟の支援を得て反乱を起こす。フリードリヒ2世は反乱を鎮圧し、ハインリヒは自害した。

1239年、グレゴリウス9世がフリードリヒ2世を再度破門する。イタリア各地で皇帝派＝ギベルン派と教皇派＝ゲルフ派の闘争が勃発し、フリードリヒ2世が構築した新体制が崩壊する。1250年、フリードリヒ2世(イタリア名フェデリーコ2世)が死去し、その後ホーエンシュタウフェン朝が断絶してドイツ帝国は大空位時代に突入する。

歴史家の多くが、フリードリヒ2世は古代ローマの再現を目指していた、と論じている。作家の塩野七生氏も、著書「皇帝フリードリヒ2世の生涯(新潮社)」で、フリードリヒ2世を「近代人」として描きながらそのような認識を抱いておられるように見える。

なるほど、フリードリヒ2世はイタリアを中心化してドイツや東ヨーロッパ諸国を周辺化しようとしていたかもしれない。だが、12世紀後半頃までに、ヨーロッパのほぼ全域で物品貨幣が消滅し、商品経済の時代がはじまっている。たとえ古代ローマの再現を目指していたとしても、聡明なフリードリヒ2世は商品経済のはじまりを認識していたはずである(現実に、彼はリュベクの帝国都市化を認めている)。

フリードリヒ2世は、ギリシャ正教徒やイスラーム教徒との交易が可能な体制を構築するには、政教分離の必要がある、と考えていたように思う。皇帝派と教皇派の闘争は政教分離派と政教一致派の争いであり、同時に法の制定権＝立法権と法の執行権＝行政権を有する「立法者」の地位をめぐる争いであった。

(皇帝派と教皇派の闘争は国法派と慣習法派の抗争でもある。「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期が重畳する12世紀後半～16世紀後半に世界各地で類似する抗争が多発している)

ところで、フィリップ2世の死後、イングランドから帰国したフィリップ2世の嫡子ルイがフランス王ルイ8世に即位するが、約3年後に死去する。その後彼の嫡子ルイがフランス王ルイ9世に即位する。そしてフリードリヒ2世が死去する前年(1249年)、第7回十字軍を編成してエジプトに進軍する。しかし1250年のマンズララの戦いで敗北し、捕らえられて捕虜になる(コラム37)。

だが、その朝エジプトでクーデターが勃発し、エジプト王朝がアイユーブ朝からマムルーク朝に変遷した。マムルーク朝は多額の身代金を得てルイ9世を釈放する。1270年、ルイ9世は第8回十字軍を編成してアフリカのチュニジアに上陸し、再度エジプトを目指すが、病死する。

翌1271年、ルイ9世の弟シチリア王カルロ1世(1266年のベネヴェントの戦いでフリードリヒ2世の庶子マンフレディを破り、シチリア王に即位した。ちなみに、ルイ9世は彼の粗暴を嫌い、彼のシチリア王即位に反対したようである)とイングランド太子エドワード(後のイングランド王エドワード1世)が第9回十字

軍を編成してアッコに向かうが撤退する。そして1289年にトリポリ伯国が滅び、1291年にアッコが陥落して十字軍都市国家が全滅する。

(歴史家の多くが、十字軍遠征は第3回十字軍遠征で事実上終わったと論じている。だが、十字軍がシリアやパレスチナで建設した十字軍都市国家は13世紀末まで残った。ムスリム軍と戦闘状態にある十字軍都市国家は多数の馬を必要とした。しかし周囲は「敵」で、放牧ができない。馬は飼料を与えて飼育するしかない。そこで、ビザンツ帝国の農民がライ麦や大麦のような家畜飼料を栽培し、ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人が十字軍都市国家に輸送する。ヨーロッパの国王や諸侯、ローマ教皇庁等が彼らに財貨を支払ったが、筆者の認識では、飼料と家畜の不可逆な交換関係が最初の位相構造＝商品経済である。ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人と十字軍都市国家の交易が経済空間に商品経済が生じるテコになった。十字軍都市国家が消滅しても商品経済は消滅しない。家畜の飼育とライ麦や大麦の栽培が続き、ユーラシア大陸西部で畜産農家が誕生する。他方、放牧が衰退した)

前章で述べたように、1261年にニカリア帝国の兵士がコンスタンティノープルを奪還し、ミカエル・パレオロコスがパレオロコス朝ビザンツ帝国を開国してビザンツ皇帝ミカエル8世に即位していた。第9回十字軍遠征から帰国したシチリア王カルロ1世がビザンツ帝国に侵攻して「ラテン帝国」の再興を目指す。2回目のリヨン公会議でギリシャ正教会がカトリック教会に譲歩し、東西キリスト教会の合同が実現する。東西キリスト教会の合同がカルロ1世の機先を制した(ちなみに、神学者トマス・アキナスが2回目のリヨン公会議に赴く旅路で死去している)。

しかし1281年、新ローマ教皇に就任したマルティヌス4世が東西キリスト教会の合同を破棄する。そしてカルロ1世がビザンツ帝国の征服と「ラテン帝国」の再興を再度目指す。だが、翌1282年にシチリア晩禱事件が勃発し、進軍が頓挫する(シチリア晩禱事件は、カルロ1世の強引な食料調達や家畜調達に反発したシチリアの民衆が蜂起した事件であったが、ミカエル8世が裏で糸を引いたとの説もある)。

マルティヌス4世は蜂起したシチリアの民衆を全員破門した。そしてカルロ1世がビザンツ帝国の征服と「ラテン帝国」の再興を再々度目指すが、イベリア半島を出港してチュニジアを攻略していたアラゴン王ペドロ3世率いる140隻の大艦隊が突如シチリア王国を襲撃する。

(アラゴン王国は、ハイメ1世(在位1213～1276年)の代にイベリア半島南西のバレアレス諸島を征服し、マヨルカ王国を建国した。ハイメ1世の死後、彼の長男ペドロがアラゴン王ペドロ3世(在位1276～1285年)に即位し、次男ハイメがマヨルカ王ジャウメ2世に即位する。ちなみに、バレアレス諸島最大の島はマヨルカ島で、面積は沖縄本島の約三倍である。音楽家のフレデリック・ショパンと女性作家のジョルジュ・サンドが滞在したことで有名であるが、現在のマヨルカ島は地中海の大リゾート地である)

アラゴン王ペドロ3世の妃コンスタンサは前シチリア王マンフレディの長女である。したがって、ペドロ3世が自身と妃がシチリアを共同統治する、と考えてもおかしくない。また、シチリア晩禱事件で蜂起した民衆がペドロ3世とコンスタンサの共同統治を望んでいた(他方、ビザンツ皇帝ミカエル8世が莫大な金貨を送り、財政面でペドロ3世を支援してもいる)。

ローマ教皇マルティヌス4世はペドロ3世を破門してアラゴン王位を剥奪し、フランス王フィリップ3世(ルイ9世の次男。在位1270～1285年)の四男シャルルに王位を授ける。アンジュー家とバルセロナ家の争いは、歴史家たちが「シチリア晩禱戦争」と呼ぶフランスとアラゴンの大戦争になった。そしてシチリア王カルロ1世とマルティヌス4世の野心、すなわち「ラテン帝国」の再興が頓挫する。

(マルティヌス4世は、ビザンツ皇帝ミカエル8世も破門している。しかし、ミカエル8世はカトリック教徒ではない。彼はギリシャ正教会の信徒で、首長でもある。ミカエル8世の破門は滑稽と言うしかない)

1285年、マルティヌス4世が死去し、しばらくしてカルロ1世とフィリップ3世、ペドロ3世も死去する。しかし新ローマ教皇ホノリウス4世のバルセロナ家に対する姿勢が強固であったため、シチリア晩禱戦争は続く。1287年にホノリウス4世が死去し、新ローマ教皇ニコラウス4世の下でようやく停戦協議がはじまる(上で述べたように、1289年にトリポリ伯国が滅び、1291年にアッコが陥落している。とはいえシチリア晩禱戦争下のヨーロッパに第10回十字軍を編成する余裕はない)。

1291年、タラスコン条約が成立し、ニコラウス4世はバルセロナ家の破門を解く。そしてアラゴン王位の継承を認め、教皇領であったサルデーニャ島とコルシカ島をアラゴン王ハイメ2世に与える。他方、シチリア王位をカルロ1世の嫡子カルロ2世に授けた。

(ニコラウス4世がハイメ2世に与えたサルデーニャ島とコルシカ島はシチリア島の代替である。とはいえ、ジェノヴァがコルシカ島を支配し続けた。1729年にコルシカ独立戦争が勃発し、その後コルシカ島はフランス領になる。サルデーニャ島はアラゴン＝スペインが支配し続けるが、スペイン継承戦争後、ハプスブルク家が支配する。その後1720年にサヴォイア家に渡り、サルデーニャ王国の領地になる。ナポレオン戦争後、サヴォイア家がサルデーニャ島とジェノヴァを支配し、コルシカ島はフランス領のまま残る。ちなみに、ナポレオン・ボナパルトの生誕地はコルシカ島である)

だが、シチリアの民衆とペドロ3世の三男フェデリーコがカルロ2世の支配に反抗する。シチリアの民衆に「破門」は通用しない。彼らはギリシャ正教やイスラーム教に改宗することもできる。失うものなど何も無いシチリアの民衆は、カルロ2世下の軍勢だけでなく、フェデリーコの兄アラゴン王ハイメ2世下の軍勢とも戦った。当然、フェデリーコも戦う。ローマ教皇庁は彼らに譲歩するしかなかった。

1302年、カルタベッロッタの和約が成立し、約20年続いたシチリア晩禱戦争がようやく終結する。シチリア王国はフランスのアンジュー家が支配するナポリ王国(概ねイタリア半島南部)とアラゴンのバルセロナ家が支配するトリナクリア王国(概ねシチリア島。トリナクリア王国を「シチリア王国」と呼ぶ場合もある)に分裂した。カルロ2世がナポリ国王に即位し、フェデリーコがトリナクリア国王＝シチリア国王に即位する。分裂したシチリア両王国に東征する力はない。西方の安全を確保したパレオロゴス朝ビザンツ帝国は1453年まで存続する。パレオロゴス朝ビザンツ帝国は、小国であったが、ギリシャ正教会＝東方正教会を護持した。そして人種や職業の差異、信仰のちがいを超越する「国民＝ネーション」を發明する。

(歴史家や社会学者、政治学者や哲学者の多くが、国民＝ネーションをフランス革命の産物であると考えている。だが、資本と資本主義はちがう。同様に、国民＝ネーションと国民国家＝ネーション・ステーツもちがう。筆者は、パレオロゴス朝ビザンツ帝国が「国民」を發明したと考える。パレオロゴス朝は、帝国を再現できなかったし、国教に代わる新たな最高法規(すなわち「憲法」)を發明することもできなかった。しかし、「国民国家」の原型を發明した。筆者の認識では、パレオロゴス朝ビザンツ帝国をもっとも模倣した西ヨーロッパの王国はテューダー朝イングランド王国である)

ちなみに、シチリア王カルロ2世の妃はハンガリー王イシュトヴァーン5世の娘マーリアである。カルロ2世とマーリアの間に子供が14人誕生しているが、タラスコン条約成立後、次女のビアンカがアラゴン王ハイメ2世の妃になり、カルタベッロッタの和約成立後、三女のエレオノーラがトリナクリア王フェデリーコの妃になる。また、早死にした長男マルツェロの息子ロベルトが後に初代アンジュー朝ハンガリー王カーロイ1世に即位する。

コラム37: モンゴル軍の敗北

第7回十字軍が敗北した後、バグダードを占領してカリフを殺害したフレグ率いるモンゴル軍がシリアに侵攻してアレppoを陥落する(フレグの西征は後述する)。だが第4代大カン・モンケが南宋遠征中に死去したため、フレグは軍の一部を副将キト・ブカに預け転進した。その後キト・ブカはダマスカスを陥落し、マムルーク朝に降伏を勧告する(アッバース朝が滅亡したとき、カリフの叔父がダマスカスに逃れている。キト・ブカはそれを知り、ダマスカスを占領したのかもしれない)。

だが、マムルーク朝の軍司令はバイバルスである。彼はモンゴル軍に殺戮されたキプチャク人部族の出身である。幼い頃に奴隷にされ、アイユーブ朝の軍司令に売られた後、数々の戦闘で軍功を上げてマムルーク朝ムスリム軍の中心的存在になっていた。そしてモンゴル軍の強さは兵士の強さではなく、武具の性能の良さであることを知っていた(したがって、正面と背後を同時攻撃すれば倒せる)。

ダマスカス陥落後、キト・ブカ下のモンゴル軍とバイバルス下のマムルーク朝ムスリム軍がパレスチナのガリラヤで激突する。その頃は、エジプトでも飼料を与えて馬を飼育していた可能性がある。草原の草を食べて成長したモンゴル軍の馬より飼料を食べて飼育したマムルーク朝ムスリム軍の馬のほうが大きい。バイバルスは大型馬の脚力を活かしてモンゴル軍を巧みに誘導し、包囲して殲滅する。

(歴史家たちは、モンゴル軍の敗因を戦術に置いている。しかし騎兵と騎兵の戦闘は馬の脚力に依存する。鉄製武具等の差で馬の脚力差を補うことはできない。ビザンツ産の馬であれば、エジプト産の馬に対抗できたかもしれない。だが、キト・ブカがビザンツ帝国やルーム・セルジューク朝に支援を要請する場面がない。キト・ブカに「思い上がり」があったのかもしれないが、モンゴル軍の敗因は戦術ではなく戦略であったと筆者は考える)

歴史家たちは、マムルーク朝ムスリム軍がモンゴル軍を殲滅した戦いを「アイン・ジャールートの戦い」と呼んでいる。そして、とりわけ西ヨーロッパの歴史家たちが、キト・ブカがキリスト教徒であったというのに、パレスチナ沿岸都市アッコの住民＝カトリック教徒たちがマムルーク朝ムスリム軍を容易にガリラヤまで行かせたため、エルサレムを奪還する千載一遇のチャンス逃したと非難する場面がある(アイユーブ朝の第7代スルターンに即位したサーリフが、フリードリヒ2世が奪還したエルサレムを1244年に奪取している)。

だが、キト・ブカはネストリウス派キリスト教徒である。そして第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊した後から、ローマ教皇庁は他のキリスト教会を異端視しはじめている。アッコの住民にとって、ネストリウス派キリスト教徒のキト・ブカは異端者であり、モンゴル軍の一翼を担ったキリキア・アルメニア王国の原始キリスト教徒たちも異端者である。彼らにとって、アイン・ジャールートの戦いは異教と異端の戦いであり、モンゴル軍に肩入れすることなどできない。しかも当時のエルサレムは城壁を失っていて、奪還しても人が安心して住める都市ではなかった(だから、ルイ9世と第7回十字軍はエジプトに進軍し、エルサレムに進軍しかなかった)。

西ヨーロッパの歴史家たちが非難しなければならないのは、アッコの住民ではなく、コンスタンティノープル破壊を事後承認して「ラテン帝国」の建国を認め、他のキリスト教会を異端視したローマ教皇庁のほうである。

6.4 ドイツ騎士修道会とハンザ同盟

ローマ教皇グレゴリウス9世がドイツ皇帝フリードリヒ2世を破門した1229年、多数の異教徒(リーヴ人やエストニア人)を殺戮したアルベルトが死去する。アルベルトの死後、刀剣騎士修道会と増援十字軍がリトアニアに侵攻した。だが、当時のリトアニアはミンダウカスが各部族を統合し、強固な軍事体制を築いていた。刀剣騎士修道会と増援十字軍はザウレ(シャウレイ)の戦いでリトアニア軍に惨敗する。その後ドイツ騎士修道会に合流し、ドイツ騎士修道会の分団＝リヴォニア騎士修道会になる。

ドイツ騎士修道会のはじまりは病院である。ドイツの貿易商たちが資金を供与し、ムスリム軍との戦闘で負傷したドイツ兵を治療するための病院＝聖母マリア病院をパレスチナのアッコに建設した。1199年、ローマ教皇インノケンティウス3世が聖母マリア病院を運営する兄弟団＝ドイツ騎士修道会の十字軍参戦を要請する。ドイツ騎士修道会は第4回十字軍に合流してエルサレムに向かう予定であったが、第4回十字軍はエルサレムに向かわずコンスタンティノープルに向かう。第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊したため、ドイツ騎士修道会はハンガリー王アンドラーシュ2世の招きに応じトランシルヴァニア地方に駐屯して異教徒＝キプチャク人と対峙した。

1224年、ドイツ騎士修道会総長ヘルマン・フォン・ザルツァがトランシルヴァニア地方の一部(プルツェンラント)をローマ教皇庁の直轄地にして「十字軍国家」を建設する許可をローマ教皇ホノリウス3世に要請した。だが、ホノリウス3世は同意したが、ハンガリー王アンドラーシュ2世は同意しない。ドイツ騎士修道会はプルツェンラントを離れ、ポーランドのマゾフシェ公コンラート1世の招きに応じてプロイセン地方に駐屯する。そして異教徒＝プロイセン人と対峙した。

1226年、ドイツ皇帝フリードリヒ2世が「リミニの金印勅書」を發布し、プロイセン地方のクルマーラント(ポーランド名ヘウムノ)をドイツ騎士修道会の領地として認める。他方、リューベクに帝国都市の地位を与え、フリードリヒ1世が与えたと伝えられている「特権」も承認する。

(フリードリヒ1世がリューベクに与えた「特権」の証書が実在したかどうかは疑いの余地があるが、ともあれフリードリヒ2世の代にリューベクが帝国都市化して「特権」が実効力を得る。「特権」は自治と共和制を容認するもので、リューベクは自治権と貨幣鑄造権、自由通商権を得る。その後リューベク法を制定し、ドイツ封建諸侯による支配を遠ざけた。ドイツ騎士修道会総長ヘルマン・フォン・ザルツァがリューベクの帝国都市化に尽力したようである。彼はクルマーラントの経営およびプロイセン人との対峙を配下のヘルマン・バルクに委ね、自身はフリードリヒ2世に同行してドイツ王ハインリヒの反乱鎮圧に尽力した。そしてフリードリヒ2世の破門解除にも尽力する。1234年、ローマ教皇グレゴリウス9世もドイツ騎士修道会のクルマーラント支配、およびプロイセン地方全体の征服と征服地の所有を認めた)

1239年、ヘルマン・フォン・ザルツァが死去する。同年、ローマ教皇グレゴリウス9世がフリードリヒ2世を再度破門し、イタリア各地で皇帝派と教皇派の闘争がはじまる。他方、1242年のチュド湖の戦いでドイツ騎士修道会が敗退し、族長シフィエントペウク(ドイツ名スヴァントポルク)がプロイセン人を東ねダンツィヒ(現在のグダニスク)を拠点にして反乱を起こす。

チュド湖の戦いは後述するが、プロイセン人の反乱(第1次プロイセン蜂起)はシフィエントペウクとドイツ騎士修道会が平和条約＝クリストブルク条約を結ぶ1249年まで続く。プロイセン人たちは、キリスト教への改宗を条件に自由を得た。他方、ドイツ騎士修道会は支配地域を北東に拡大し、1255年にケーニヒスベルク(現在のカーニングラード)を建設する。

1260年、ドゥルベの戦いでドイツ騎士修道会がリトアニアに大敗した後、第2次プロイセン蜂起が勃発する。支配地域を拡大して兵力を分散していたため、ドイツ騎士修道会は各地の戦闘で敗北した(ちなみに、第1次プロイセン蜂起を指導したシフィエントペウクは第2次プロイセン蜂起に加担していない。当時の彼は「キリスト教徒」であった)。

ローマ教皇ウルバヌス4世が十字軍遠征を呼びかけ、ドイツ各地の諸侯がプロイセンを目指す。第2次プロイセン蜂起は1274年まで続き、ドイツ騎士修道会と十字軍は多数のプロイセン人を殺戮した。その後第3次プロイセン蜂起が勃発したが、プロイセン人は死者を増やすだけであった。プロイセン人の反乱は1282年頃に終結する。生き残ったプロイセン人の大半がリトアニアに逃れ、彼らの居住地がドイツ人の植民地＝北方十字軍国家になる。

ドイツ騎士修道会が支配する「北方十字軍国家」は1410年のグレンヴァルトの戦い(タンネンベルクの戦い)で大打撃を被り縮小するが、それについては後述する。注視すべきことは、リガ、タリン、ケーニヒスベルク、ダンツィヒといったバルト海沿岸都市がドイツ騎士修道会の支配下に入ったことである。そして帝国都市リューベクと同盟＝ハンザ同盟を結んだことである。

リューベクを盟主とするハンザ同盟はロンドンとノヴゴロド、フランドル地方のブルッヘ、ノルウェーのベルゲンに商館を置いた。そしてハンザ商人(各ハンザ都市の個人商人)がバルト海貿易を支配する(バルト海沿岸都市は概ねリューベク法を導入して自治を確立した。しかしシュテチンやケーニヒスベルクはドイツ都市法＝マクデルブルク法を導入している)。

ちなみに、現在のサントペテルベルク市は沼地であった。当時の「ロシアの玄関口」はノヴゴロドである。ハンザ商人が乗船する商船がバルト海を越えてネヴァ川を上り、ラドガ湖を渡ってヴォルホフ川を上り、イリメニ湖を渡ってノヴゴロドで商いを行った。当時のバルト海貿易で西から東に輸送する主な商品は毛織物と塩である。東から西に輸送する主な商品は毛皮と木材、蜜蝋である。蜜蝋は教会等のロウソクで使用

した。やがて東から西に輸送する主要商品が木材や小麦になる。そして琥珀や銅、スカンジナビア半島で採掘する鉄鋼石が主要商品になる。鉱石レベルであったが、「鉄」の海上輸送がはじまった(コラム38)。

(リューベクとノヴゴロドが交易をはじめた12世紀後半のバルト海貿易は、ゴットランド島のヴィスビューが中継地としての役割を担った。13世紀後半からダンツィヒ(ポーランド名グダニスク)が中継地としての役割を担うが、ヴィスビューは衰退しなかった。ゴットランド島はバルト海最大の島で、面積は沖縄本島の約2.5倍である。ゴットランド島は農耕が可能で塩山もある。ゴットランド島に移住したドイツ人たちが生産する小麦や塩がヴィスビューを支えた。ちなみに、バルト海沿岸は当時の西ヨーロッパ諸国のフロンティア＝新天地で、次のフロンティアが北米大陸や中南米大陸、カリブ海諸島になったと論じる歴史家もいる。しかし、上で述べたように、「旧フロンティア」ではキリスト教に改宗した先住民＝プロイセン人たちが自由を得ている。すなわち、奴隷から解放された。だが「新フロンティア」では、先住民＝インディオやアフリカ人がキリスト教に改宗しても奴隷のままである。筆者は、そこに「広義の中世」が重畳する「広義の近代」の出現期と、「広義の中世」が重畳しない「広義の近代」の突破期のちがいがあると考える。具体的には、奴隷が「財産」であるか「商品」であるかのちがいである。「広義の近代」の突破期に、市場経済の下で奴隷が「財産」から「商品」に移行する)

コラム38: ハンザ同盟の対デンマーク戦争

ハンザ商人の活躍を快く思わない勢力もいた。その典型がデンマーク王国である。デンマークの主な輸出品は牛で、陸路でドイツ各地に輸送していた。他方、デンマークは艦隊を保有し、バルト海の制海権とバルト海貿易の支配を窺っていた。

1360年、デンマーク艦隊が突如スカンジナビア半島南部の漁場を襲い、翌1361年にゴットランド島のヴィスビューを占領する。そしてバルト海貿易(ノヴゴロドとの交易等)を一時支配する。

1362年、ハンザ同盟は連合艦隊を編成し、リューベク市長ヨハン・ヴィッテンボルクが総指令に就任してヴィスビュー奪還を試みる。この連合艦隊は惨敗したが、しかしハンザ同盟は連合艦隊を再度編成し、新リューベク市長ブルーノ・ヴァーレンドルフが総指令に就任してデンマークの首都コペンハーゲンを襲撃する。1370年、デンマーク王ヴァルデマー4世はハンザ同盟と平和条約(シュトラールズント条約)を締結し、ヴィスビューから撤退した。

「広義の近代」出現期前半の個人商人は自身で商品を運送していた。彼らは「武人」でもあった。ハンザ同盟の対デンマーク戦争は、彼らが「武人」であることを証明している。とはいえ、シュトラールズント条約を締結する場面でハンザ同盟は領土を一切要求していない。ハンザ同盟がデンマークに要求したのは、海運の安全と自由、そして損害賠償だけである。

歴史家たちは、ハンザ同盟が領土を要求しなかったことを賞賛し、商人が建国した都市国家の有り様を高く評価する。だが筆者の認識では、ハンザ同盟が領土を要求しなかったのは、彼らが商人集団であったからではない。ハンザ同盟を構成する各都市はドイツ帝国の一部である。そして、ドイツ帝国で他国に領土の割譲を要求できるのは立法者＝ドイツ皇帝だけである。ハンザ同盟は、デンマークに領土を要求しなかったのではなく、できなかったのである。

筆者の認識にしたがえば、古代アッシリアの「アッシュルの身体」が国体の起源で、古代ギリシャのポリスが政体の起源である。その後中世に、政体を取り込んだ国体＝中世帝国が誕生するが、中世都市国家は中世帝国ではない。中世都市国家は政体だけの存在である。近代になっても「国体なき政体」が存在する。たとえば、ヴェストファーレン条約以前のオランダは政体だけの存在であった。現在のシンガポールやパナマも政体だけの存在である、と言えるかもしれない。

(ちなみに、リューベクは海洋国家であったと言うことも、おそらくできない。そもそも、漁業や海運、海軍だけを基準にして海洋国家を論じることができない。筆者は、海洋国家であるか否かは陸の支配体制を海に拡大するか否かにあると考える。筆者の認識では、1429年にデンマーク王エーリク7世がエーレスンド海峡の通行税を制定した後、ヨーロッパで陸の支配体制が海に広がりはじめた。すなわち、「海洋国家」が誕生するのは15世紀以降で、14世紀に勃発したハンザ同盟の対デンマーク戦争は海洋国家が誕生する前の戦争である。アジアで陸の支配体制が海に広がり始めるのは16世紀末頃からである。それについては後述するが、ヨーロッパよりかなり遅い)

ところで、ハンザ同盟に敗北したが、デンマーク王ヴァルデマー4世は名君であった。だが真に「名君」の名に値するのは彼の末娘マルグレーテかもしれない。彼女は1397年にデンマークとスウェーデン、ノルウェーの同君連合＝カルマル同盟結成に尽力し、三国を事実上支配する。

その後1520年に「ストックホルムの血浴」事件があり、1523年にグスタフ・ヴァーサがスウェーデン王グスタフ1世に即位する。エーリク7世が制定したエーレスンド海峡の通行税撤廃を求めるリューベクはスウェーデンを支援した。スウェーデンが独立し、カルマル同盟は崩壊したが、しかしデンマークは伯爵戦争(1534～1536年)でリューベクに雪辱し、その後オランダがバルト海貿易を支配する。

その頃のハンザ商人は商品の運送に直接関与しなくなっていた。彼らは帳簿を管理し、商品の搬入と搬出を指図するだけの存在になっていた。他方、デンマークは1612年にデンマーク東インド会社を創立して通商国家に進展する。

6.5 モスクワ公国の誕生

1240年、バトゥ率いるモンゴル軍がキエフを占領して破壊した。バトゥはヤロスラフ2世(ウラジーミル・スーズダリ公ユーリー2世の弟)にキエフ公国の統治を委ね、モンゴル軍を率いて西方に進軍する。その後のレグニツァの戦い(ワールシュタットの戦い)とモヒの戦いはすでに述べたが、他方、ヤロスラフ2世は次男アレクサンドルにノヴゴロド公を命じる。

チュド湖の戦いでドイツ騎士修道会を破ったのはノヴゴロド公アレクサンドルである。アレクサンドルはネヴァ河畔の戦いで当時のスウェーデン軍を破り、さらにチュド湖の戦いでドイツ騎士修道会を破った。

(チュド湖の戦いは「氷上の戦い」と呼ばれ、セルゲイ・エイゼンシュテイン監督が製作した映画「アレクサンドル・ネフスキー」の戦闘シーンが有名であるが、現実の戦闘はドイツ騎士修道会がアレクサンドルの海戦術に怯え、ほとんど戦うことなく撤退したらしい)

1243年、バトゥはヤロスラフ2世をウラジーミル・スーズダリ公に任じる。キエフ大公国の中心がキエフ公国からウラジーミル・スーズダリ公国に移動した(あるいは、キエフ大公国が「ウラジーミル・スーズダリ大公国」になった)。その後ヤロスラフ2世は次男アレクサンドルと三男アンドレイを引き連れカラコルムに赴く。ヤロスラフ2世はグユクの大カン即位に参列し、おそらくアレクサンドルのノヴゴロド公即位とアンドレイのウラジーミル・スーズダリ公即位の承諾を得た。だが帰路の途中で死去する。

ヤロスラフ2世が死去した約2年後、大カン・グユクが死去する。グユクの死はおそらく暗殺で、黒幕は次の大カン・モンケである。グユクの死後、ウラジーミル公アンドレイは反抗的になる。しかしノヴゴロド公アレクサンドルはバトゥに臣従する。1252年、アレクサンドルは弟アンドレイを追放し、ウラジーミル・スーズダリ公を兼任した。

アレクサンドルの死後、彼の末子ダニール・アレクサンドロヴィチがリューリク朝モスクワ公国を開国し、その後モスクワ公の縁者がノヴゴロド公を兼任するようになる。モスクワ公国がノヴゴロド公国の宗主国になり、民衆がノヴゴロド公を追放する場面がなくなった。とはいえ、ノヴゴロドの共和制は続き、14世紀に「民主共和制」に進展する(コラム39)。

ノヴゴロド公アレクサンドルのモンゴル帝国あるいはジョチ・ウルスへの臣従を責めることはできない。ウラジーミル2世の死後、キエフ大公国は事実上解体した。そして、キエフ地方が衰退する。1223年のカルカ河畔の戦いでは、各公国が連帯してモンゴル軍と戦ったが、その後連帯する場面がない(1238年のシチ川の戦いでウラジーミル・スーズダリ公ユーリー2世がモンゴル軍と戦い戦死したが、彼の戦力はドローフェイ・セミーノヴィチと約3000名の兵士だけであった)。

カルカ河畔の戦い後、キエフ大公国は消滅する。他方、第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊して「ラテン帝国」を建国した後、カトリック教会はギリシャ正教会を分離主義者と呼び異端視した。だが、モンゴル帝国はすべての信仰に寛容であった。アレクサンドルには、ギリシャ正教会をカトリック教会から守る責務がある。それは在住のスラヴ人＝ロシア人の共同体を守ることでもある。アレクサンドルは、モンゴル帝国に臣従するしかなかった(コラム40)。

1380年のクリコヴォの戦い後、「タタールのくびき」が外れ、モスクワ公国が巨大化するが、それについては後述する。重要なことは、ジョチ・ウルスの支配地域がキプチャク人が支配していた地域に収まった、ということである。ジョチ・ウルスが「キプチャク・ハン国」と呼ばれるのはそのためであるが、モンゴル軍がウラル山脈以西で殺戮した人々の大半がキプチャク人である。奴隷にされて売られたキプチャク人も多数いた。

すでに述べたが、ガリラヤでキト・ブカ下のモンゴル軍を殲滅したマムルーク朝5代スルターン・バイバルスは奴隷にされて売られたキプチャク人である。ホムスでアバカ率いるモンゴル軍を撃退したマムルーク朝8代スルターン・カラーウーンも奴隷にされて売られたキプチャク人である。

他方、在住のスラヴ人＝ロシア人にとって、ジョチ・ウルスは外在する帝国である。あるいは世界帝国＝多言語多制度空間である。

コラム39: ノヴゴロドの民主共和制

歴史家や社会学者たちは、ノヴゴロドが商業都市であったため、ノヴゴロドで共和制が誕生した、と論じている。だが、ノヴゴロドで共和制が始まるのは12世紀で、ノヴゴロドが商業都市化する前である。

14世紀にノヴゴロドの共和制が進化し、民主共和制になる。すなわち、貴族階級だけでなく民衆(商工業者等)も市長を選出するようになる。

(封建制と民主制が同時代に誕生し、しかも民主制が誕生した場所はキエフ大公国＝ロシアである。ポーランドの歴史家やポーランド史の専門家は認めないと思うが、後のポーランドのシュラフタ民主制(貴族民主制)はノヴゴロドの民主共和制の模倣である、と筆者は考える)

ビザンツ帝国との関係が深く、キエフ大公が「立法者」であったことが、ノヴゴロドの共和制を可能にしたように思う。民主制については、国教会がギリシャ正教会であったことが大きい。ギリシャ正教会の司祭たちは、ギリシャ語と古代ギリシャの文献に精通していた。すなわち、古代アテネの民主制を熟知していた。ノヴゴロドの民主共和制は1477年にモスクワ大公イヴァン3世が併合するまで続く。

当時のロシアにとって、ネヴァ川とラドガ湖、ヴォルホフ川とイリメニ湖は重要なシーレーンであった。この「シーレーン」は17世紀の北方戦争と18世紀の大北方戦争を考察する上で不可欠な条件であり、クラウゼヴィッツが「戦争論」を執筆する場面で参照した理由もそこにある。鉱物資源が豊富なカレリア地方の争奪も見落とせないが、モスクワ大公イヴァン4世は新たな「シーレーン」を得るために1570年の大粛正＝ノヴゴロド粛正を行ったのかもしれない。

コラム40: 東方正教会

歴史家の杉山正明氏は、著書「モンゴル帝国の興亡<上・下>(講談社現代新書)」で、ノヴゴロド公アレクサンドル(アレクサンドル・ネフスキー)を狡猾な人物であるかのように論じている。だが、本文で述べたように、アレクサンドルにとって守らなければならないものは消滅したキエフ大公国ではない。守らなければならないものはギリシャ正教会であった。

第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊した後、カトリック教会はギリシャ正教会を分離主義者と呼び異端視する。ローマ教皇が「ラテン帝国」の建国を認めたため、そうするしかなかったのかもしれないが、カトリック教会の異端敵視は激化していた。山内進氏の著作「北の十字軍(講談社学術文庫)」によれば、インノケンティウス3世の死後、ローマ教皇に就任したホノリウス3世(在位1216～1227年)は以下のように述べ、スウェーデン軍とドイツ騎士修道会のノヴゴロド侵攻を後押ししている。

「余は命ずる。ロシア人たちは首長であるローマ教会から離れてギリシャ人たちの儀式(ギリシャ正教会の儀式)に従ってきた。まさにその地において、カトリックの儀式に従うよう強制されねばならない」

ネヴァ河畔の戦いとチュド湖の戦い後もウラジーミル・スーズダリ大公国軍とポーランド・ハンガリー連合軍との間で戦闘が勃発している(1245年のヤロスラヴの戦い)。カトリック勢力がロシアの大地を蹂躪し、ロシア人の共同体を破壊しようとしていた。そのような場面で、ギリシャ正教会を容認するモンゴル帝国に敵対するのは馬鹿げている。アレクサンドルには、モンゴル帝国＝ジョチ・ウルスに臣従する以外に選択肢がなかった。バトゥの死後、ジョチ・ウルスのカンに即位したベルケは熱心なムスリムで、旗下のモンゴル兵全員にイスラーム教への改宗を命じたが、ギリシャ正教会の布教も認めている。

ちなみに、ヴォルガ川の上流がウラジーミル・スーズダリ公国である。ヴォルガ川下流の都市サライに東方の富＝物産を集積すれば、ヴォルガ川経由でウラジーミル・スーズダリ公国とノヴゴロド公国に輸送できる。また、陸路でクリミア半島沿岸にも輸送できる。サライはバルト海貿易と黒海・地中海貿易の中継拠点都市になり、商品経済の下で人口60万を越える大都市に発展する。

1261年、ミカエル・パレオロゴス＝ミカエル8世がコンスタンティノープルで即位し、ビザンツ帝国が復活する。復活したビザンツ帝国は小国であったが、地中海と黒海を結ぶボスポラス海峡とダーダネルス海峡を支配する。そしてギリシャ正教会を支え、ロシア人とロシアの可能性を高めた。以後、ギリシャ正教会を「東方正教会」あるいは「オーソドクス」と呼ぶ。